

ラテンアメリカ都市物語

＝第22回＝

世界一危険と いわれた国の首都 テグシガルパ

神谷 静



写真1：エル・ピカチョから眺めるテグシガルパの風景（写真はすべて筆者撮影）

はじめに

ホンジュラス共和国の首都テグシガルパは、国の中央部分に位置する。金や銀などの鉱物採取を目的として、1578年、スペイン植民地時代に誕生した。海拔約1,000mに位置し、標高500m程度の山地に囲まれた盆地状の地形に形成された都市である。およそ1,500km²の広さの土地に、126万人がひしめく。1988年の国勢調査では、人口60万人余りであったことから、ここ30年ほどで2倍にまで増えたことが分かる。雨期と乾期に分かれてはいるものの四季はなく、年間を通して22℃前後と過ごしやすい。それ故に、国境を接するグアテマラやエルサルバドルと同様に、常春の都市といわれる。一方で2011年にホンジュラスは人口10万人当たりの殺人件数が世界一となり、

テグシガルパは危険な都市として認知されてきた。

筆者は2007年から数年テグシガルパに滞在し、その後縁あって2021年に再度、居を構えることになった。その10数年の時の流れを経た都市としての変化を、思うままにここに紹介しようと思う。以前ホンジュラスに来られた方やホンジュラスに興味のある方々に読んでいただき、参考となるようであれば幸いである。

テグシガルパの思い出

テグシガルパは今では、様々な輸入品で溢れる。スーパーに行けば、輸入食材コーナーがあり、欧米のチーズやハムなど生鮮品がずらりとならぶ。アジア食材には限りがあるが、ある程度のものはそろい、舌の肥えない私にとっては申し分ない。だが、ひと

昔前はそう簡単に欲しいものも手に入らなかった。ある時無性にカレーが食べたくなった私は、スーパーで見つけたカレーパウダーでカレーライスの自作を試みた。完成に歓喜したのも束の間、その衝撃的な不味さに、なぜか涙がこぼれた。ほんわかと生きてきた日本では経験できなかったであろう、今でも忘れることのできない思い出だ。

当時は街並みも正に「無秩序」で、アニヨ・ペリフェリコ (Anillo Periférico) と呼ばれる市街外周をつなぐ環状道路から一本内側に入ると、たちまち複雑に入り組んだ細道に方向性を失った。途中、マンホールがなかったり、タクシーが逆走して来たり、信号機が壊れていたり、まるで自分の良心を試されているかのように、移動はとても大変なものだった。

そして2009年6月28日、朝目覚めると空をけたたましくヘリコプターが舞っていた。電気もなく、テレビも電話も通じなくなっていた。セラヤ元大統領がパジャマ姿でコスタリカに連れ去られるというクーデターが起きた日だった。ホンジュラスでは2000年代に入りすでに治安の悪化が進んでいたものの、このクーデター後、社会情勢の不安定化も相まって、まさに崖を転がり落ちるかのように治安が深刻化していった。そして2011年には10万人当たりの殺人件数が世界一となり、最も危険な国として全世界にその名を轟かせた。その傷は想像以上に深く、10年経つ今でもその不名誉なレッテルはこの国の足枷となっている。

テグシガルバの街並み

テグシガルバ市の行政区は、地図を見るとわかるように、町を南北に縦断する Choluteca 川 (Río Choluteca) を境として、西側の コマヤグエラ

図：テグシガルバ首都圏地図



出所：GoogleEarth を使い筆者作成

(Comayagüela) と東側のテグシガルバという2つの町を併せた地域で構成される。

コマヤグエラは、碁盤の目で区切られた旧市街地 (セントロ地区) があり、スペイン植民地時代の名残である美しい建築物やひと昔前のレトロな看板がフォトジェニックな街である。大規模な生活用品・生鮮食品等を取り扱う昔ながらの市場が点在し、国中のありとあらゆるモノとヒトが行き交い、多くの首都圏住民の生活を支えている。最近完成した行政センター (Centro Cívico Gubernamental) という高層ビル群に行政機能の集約化が進められているが、少し前までは教育省や財務省など政府機能のほとんどはコマヤグエラに所在していた。コマヤグエラは、ホンジュラス首都圏の政治や経済発展の歴史的な中心地であったと言える。一方で、街の様子は何年たっても変わらない。むしろ、時間が止まったかのように再開発も進まず、犯罪の多くもこの地域で発生している。

対岸のテグシガルバは、比較的新しい新興地帯である。特に高所得者層が居住する地区では、小高い



写真2：輸入食品が並ぶ市内のスーパー
(Super Mercado La Colonia, La Hacienda)



写真3：国立スタジアム前の風景

山の斜面に高層マンションが建ち並び、言わば「勝ち組の丘」と化している。街を一望できる勝ち組の丘からの夜景は、満点の星空を眺めているように美しい。ただ、それは、コマヤグエラに住む大多数の一般的ホンジュラス人—日々の生活にも苦勞する無数の人々—の慎ましい家の灯だということを忘れてはならないだろう。

このことを実感できるのは、巨大なキリスト像が山の頂上に設置されているエル・ピカチョ (El Picacho) という国立公園からの眺めだ。市民の憩いの場となっているこの公園の展望台から首都の街を見渡すと、小さな家がひしめく街並みに、異端に飛び出すマンション群が孤島を形成していることに目が留まる。我々が求める生活レベルは、この街では実はマイノリティであることを改めて実感させられるのである。

近年では、コマヤグエラとテグシガルパの中心地形から輪を描くように、外側に向かって急速に首都圏が広がりつつある。ただ、周りを山に囲まれているため、特に市北部地域では、山肌にへばり付くように貧困層の密集地域が広がっている。一方、南方方面の比較的平地の多い地域では年2～3件のペースで中所得者層をターゲットとした住宅地開発事業が急速に進んでいる。

変化する都市インフラ

テグシガルパは人口の増加にともない急増する乗用車による深刻な渋滞問題が都市課題となっていた。現

在2期目を務めるナスリー・アスフラ市長は、高校を出ただけの建設業の出身で政治家に上り詰めた人物として有名で、渋滞緩和のための市内道路網の整備を精力的に進めてきた。2012年に小さな立体交差が初めてスヤパ通りに登場し大騒ぎしていたのは遠い昔、いまでは街のいたるところに巨大な立体交差が建設され、交通の便は遥かによくなった。道は拡幅され、更には多くのバイパスが整備されたおかげで、街が一気に近距離化し、人々のモビリティは格段に向上した。以前、信号待ちでは強盗に注意をしなければならなかったが、交差点がロータリーに置き換わったことで、多くの場所で信号機が廃止され、今ではほとんど信号待ちをする必要がない。大小ショッピングモールが至る所に現れ、日本でも目にするようなブランドやメーカーの品物も手に入れることができる。物質的には、首都の人々の生活は確実に且つ大幅に向上したと言えるだろう。自作カレーに泣いた14年前とは打って変わって生活環境は良くなった。お金さえ出せばおおよそのものは手に入れることができ、ぜいたくを言わなければ十分な生活を送ることができる都市に成長した。

都市としての限界をどう乗り越えるか

これまで10数年の間に起きたテグシガルパの街の発展について述べてきた。すり鉢状の盆地に形成された都市である以上、その面的広がりには限界があり、すでに人口受容力は超過していると言わざるを得ない。特に深刻な問題は、水不足と斜面災害だろう。富裕層が住む地域でも、雨期でさえ配水は6日



写真4：行政センタービル群



写真6：サンタ・アナの風力発電機群



写真5：拡幅され立体交差が設置されたケネディ通り

に一度である。郊外にある2つの貯水ダムの貯水率は20%台を記録する日々が続き、水不足は深刻だ。そこに、漏水など無収水率の高さが追い打ちをかける。また、貧困層が多く住む勾配の急な地域では、生活排水の垂れ流しも相まって地すべりなど土砂災害が発生しやすい。2013年に国際協力機構（JICA）の協力によりテグシガルパ全域の地すべりインベントリーマップが作成されたが、大小合わせておよそ2,000か所ほどの地すべり地形が確認されている。日本の得意とする斜面災害対策の技術は開発途上国では大きな価値を持つ。

国の経済を支えながら持続的な都市開発を進めるためには、インフラ整備はもちろん重要だが、中・長期的な都市計画の整備と災害に強い安心して暮らせる住居環境のための土地利用計画・法整備などソフト面の強化も不可欠である。山に囲まれ、少ない土地を活用しながら質の高い生活を実現してきた日本にとっては、様々な側面から、知見を共有できるのではないだろうか。

一歩外に出れば

テグシガルパの生活は物質的には満たされるものになったが、もしもふと疲れを感じたら、ベランダにでて椅子に座り、ホンジュラス産の美味しいコーヒーを飲みながら、ぼーっと山を眺めてみてほしい。雑然とした生活音の奥の景色に目をやると、北方の山にはキリスト像が、南方の遠い丘陵線には無数の風力発電機のプロペラが優雅に旋回しているのが見える。空は時間によって変化する。朝方は澄んだ空気が流れ、微細なステンドグラスが美しいスヤパ教会から太陽の光が差し込む。夕方は日本の秋のような少し寂し気な赤紫色の空が風に心地よい。

テグシガルパから数km東に行けば、サンタ・ルシア（Santa Lucía）やバジェ・デ・アンヘレス（Valle de Ángeles）という土壁に煉瓦色の丸瓦の伝統的な田舎町があり、その更に奥にはサン・ファンシート（San Juansito）という廃墟となった町に行きつく。1879年に操業を開始した米国資本の鉱山会社の跡地で、当時使われていたカントリー風の労働者宿舎が今でも残る。その朽ちつつも自然と同化した風景は、どこかノスタルジックで、栄枯盛衰の結末に居合わせたかのような不思議な雰囲気包まれる場所だ。

またテグシガルパから南方面に1時間半ほど行くと、サン・ロレンソ（San Lorenzo）の港町に着く。

日本人の大好きなエビ養殖が盛んで、海鮮料理に舌鼓を打ちながら、マングローブの広がる海を眺めるのも格別である。

テグシガルパ周辺には余暇を過ごすための言わばサテライト田舎町が多く、都会の生活に疲れたら、息抜きに一歩外に足を運んでみてほしい。ちなみに、穴だらけだった地方アクセス道路は、今では立派な舗装道路に生まれ変わっている。

おわりに

2014年から続く現政権は、警察の組織改革を含め、2011年に世界一を記録した深刻な治安状況を打開するために治安対策に力を入れてきた。軍警察が創設されたことに加え、警察改革が実施され、警察の業務環境は大幅に改善され、警察署等のインフラだけではなく、法的側面からも警察官の採用基準や人材育成制度等が大きく改善された。その結果、10万人当たりの殺人件数は2020年には37.6件となり2011年からおよそ6割低下している。テグシガルパだけでみると、2011年の殺人件数は99.9件で世界第5位であったが、2019年には43.3件と世界第39位にまで低下している。治安改善の取り組みには、JICAが10年以上にわたり支援する地域警察プロジェクトも重要な役割を果たしてきたことを付け加えたい。治安の改善は生活の質向上に直結するだけではなく、国の発展に不可欠な要素である。ただ、一朝一夕で成せるわけではない。長期に渡る様々な努力により、治安状況や生活の質は変化してきていることは確かである。テグシガルパ市内では公園の整備も進められており、土日には家族連れで自然を楽しむことのできる場所も増えた。10年経ついまでもホンジュラスのイメージとして染みつく「危険な国」という印象を早く別の言葉で上書きできる日が来ればよい。本稿がその一助となることを願ってやまない。

参考文献

- ・ Honduras Tips “Tegucigalpa: una capital que conmemora 441 años de historia y tradición” (<https://www.hondurastips.hn/2019/09/26/tegucigalpa-una-capital-que-conmemora-441-anos-de-historia-y-tradicion/>)
- ・ ホンジュラス統計局
(INE: Instituto Nacional de Estadística) 国勢調査結果
- ・ ホンジュラス警察統計システム
(SEPOL: Sistema de Estadística Policial)

（かみや しずか 国際協力機構（JICA）ホンジュラス事務所
企画調査員一企画）